

ツナグ幸せ

長岡市立青葉台中学校

二年 江口 りり子

予想もしていなかった突然の休校……。不安と少しの憤りを感じながらも、何もしない自分とは違い、我が家では朝から両親が出かけるギリギリの時間まで家事をし、帰宅後も休む間もなく夕食作りをする姿があった。こんなにも親が協力し合って私を育ててくれたのだと気付いた時、食卓に用意されている食事を当たり前のように食べていた今までの自分が恥ずかしくなった。

休校で家にいた私は、親がしていた家事を見様見真似でやったところ、親はとても喜んでくれた。こんなことで喜んでくれるのならばと調子に乗った私は、家庭以外で自分が役に立てることはないかと考え、最近メディアでもよく耳にする「ヘアドネーション」に協力しようと考えた。私にしたら小さな挑戦だった。

今まで美容院に行けば、「太くて量も多くて立派な髪ね。」と必ず言われることが本当に嫌だった。友達のようにふわふわで人形のような髪に生まれたかったと親に不満をぶつけたこともあった。でも、この髪で役に立てるならばと髪を切る決心はおかげで容易に出来た。美容院で髪を切る時、いつも通りの誉め言葉をもらったが、あんなに嫌だったその言葉も、この髪だから大丈夫と言われているような気がして、初めて自分の髪を誇らしく思えた。調子に乗ってメディアに影響された私の小さな挑戦は、私の大きな自信に変わったのだ。

美容院の帰り道は、その自信と一緒に髪のを送ってしまったおとうと、貯めたお小遣いを持って窓口へと向かった。受付で荷物の中身を確認された私は、髪の毛だと自信を持って伝えると、受付の方が明らかに「えっ？」という顔をしたのがわかった。時間にしたら数秒だったが、その間がとて長く感じた私は、急に自信がなくなり言葉が出ず、立ちつくしてしまった。後ろで待っていた親が見かねて「ヘアドネーションに協力したくて！」と答えてくれた。おかげでその場の空気は元に戻ったが、私の気持ちは沈んでしまった。帰りの車中では落ち込む私に、「最初から完璧にやれる人なんていないから大丈夫。」と励ましてくれる親の言葉に、私はハッとされた。私が人の役に立てると考えた「ヘアドネーション」は、協力するまでに美容院で私の希望通りに髪を切ってもらい、親からは美容院や発送に連れて行ってもらった。私一人では何も出来ていなかったことに気付いたのだ。

しかし、中学生の私に出来ることはこれが精一杯だとも思った。出来る時に出来ることをやる、これが今の私に出来ることのはずだ。私の嫌いだっただ髪が、色々な人の力を借りて、頭髮に悩みを抱える人への幸せに繋がって欲しいと願ったことは、私の勝手な自己満足なのかもしれない。でも、人は一人では何も出来ないということ。人は助け合って生きているということ。当たり前な日常が幸せだということ。多くのことに気付かされた休校期間だった。

とつさに動いたぼくの足

長岡市立青葉台小学校

四年 宮下音奏

ゆっくりゆっくり歩くおじいさん。周りの人は、どんどんおじいさんを追い込めていく。中には、

「じゃまなじいさんだな。」

心のない言葉をかけて、わざとぶつかるように、ぬきさつて行った人がいた。おじいさんは、よろめいて転んでしまった。

その日病院に入るのがあと五分という時間で、しんさつけんを出さないと間に合わない。でも自分の目の前で、おじいさんが転んでしまった。ぼくは、どうして良いか頭の中がパニック。でもとつさに声をかけていた。

「あー。だいじょうぶですか?」

「うー。イタタタタ：歩けんわい。」

そう言いながら、おじいさんは立とうと必死に動こうとするが動けない。車のとめる所がなくお母さんはまだ来ない。すぐく頭の中がパニックだった。でもあともう少しの病院の入り口までなら、自分でもおんぶ出来るかなと思って、おじいさんをなんとか立たせ、ぼくの背中に乗ってもらった。おんぶもうまく出来ないぼくは、よろめきながらおじいさんを三十メートル位おんぶして連れてきた。

「すみませーん。」

と何度かよぶと、受付の人が出て来た。ぼくは、説明して、おじいさんをおろした。

「あ!自分のしんさつけん入れるの忘れた!どうしよう。」

と、自分のことをするのを忘れてしまった。まだ中には、かんじやさんが何人かいたのでそおと中へ入った。すると受付の人に、「めろ君。すごいねー。人助けしたんだね。おじいさん、あのほっちゃんにお礼を言いたいわって言ってしんさつ室に入って行ったよ。」と言われた。それよりぼくは、しんさつけんがだせなくて、お母さんにおこられると思つてふあんな顔をしていると、

「めろくんのしんさつもちゃんとするから。」

と言つてもらえた。

少しして、お母さんが入つて来たけれど、お母さんは、この事を知らない。しばらくしてぼくの番になった。しんさつは、一番最後。先生は、ぼくを思いっきりほめてくれた。そしておじいさんが帰りに、

「よそのじいちゃんを心配してくれる子、なかなかないぞ。ほんとうにありがとう。」

といいながら、深くおじぎをしてくれた。

ぼくは思った。とつさの時つて何も考えず体が動くんだ。言葉よりが動いてしまった。人見知りのぼくでもできたんだと、ちょっぴりてれくさくて、まんぞくだった。後からお母さんが来て話を聞いてぎゅつとだきしめてくれた。ぼくは自分に言いかけた。

「思いやりの助けつて考えるより行動しちゃうんだ。」

ぼくは、うん、うん、とうなずき、ちょっぴり大人になった。

ぼくのちようせん

長岡市立日越小学校

三年 金子 二郎

ぼくは、小学校三年生の男の子ですが、かみの毛がけんこうこつ
の下のあたりまでのびています。ヘアドネーションをするためです。

ある日、お母さんがユーチューブで見せてくれた動画には、かみ
の毛の長い男の子がうつつていました。その子は、ようち園から四
年間のばしたかみの毛をバツサリ切ってびよう気でかみの毛がぬけ
てしまう友だちのためにかつらを作るヘアドネーションをしていま
した。ぼくは、すごいなあと思ひ、お母さんに「ぼくも、やりたい」
といひました。お母さんは、すぐにさんせいしてくれて、ぼくのへ
アドネーションへのちようせんがはじまりました。

ヘアドネーションには三十一センチいじようの長さのかみの毛が
ひつようです。ぼくは、二年生からのばしはじめたので小学校をそ
つぎようするまでのばすと決めました。けれど、のばしはじめたこ
ろ、かみの毛が気になつてさわつたり、ヘアピンやヘアバンドで手
いたずらをしてじゅぎようにしゅう中できなくて、しかられて反せ
いしました。その時お父さんに自分のやらなきやいけなひこと、じ
やまになるならかみの毛をのばすのをあきらめなさいと言われまし
た。ぼくのかみの毛をまつている友だちがいて思つたから、手い
たずらとかをしなひようにならばりました。

ほかに、かみが長くなつてきてはじめは、まわりの友だちにか
らかわれてあきらめたいきもちになつてしまつたけど、言われるの
にもなれてつよい、がんじような心ができました。それに、毎日で

いねいにあらつてくしでいっしょうけんめいとくして早くきれい
にのびるように入力している、ぼくのかみの毛はたからものだか
らプレゼントするまで、あきらめられませひ。今もヘアドネーション
をまつている友だちがたくさんいて、その子たちも毎日がんばつ
ているので、まだまだ道のりは長いけどぼくもがんばります。



助け合いの輪

長岡市立日越小学校

六年

渡邊

笑

私のおじいちゃんは体の中ばい菌が入って、目が見えなくなる病気です。昔よりもできることが少なくなっていました。

昔は、一緒におじいちゃんの家で、くるみわりや車でいろいろなところに回ったり、つりに行ったりしていました。おじいちゃんの仕事は大工さんです。いつも元気に仕事場へいきます。でも病気になるってしまつて、今までできていたことができなくなつてしまいました。それと目も見えなくなつていき耳も聞こえにくくなつていきました。そんなおじいちゃんを見て「おじいちゃん大丈夫かな」「心配だな」と思いました。でも、おじいちゃんはリハビリを一生けんめいがんばっていました。リハビリでは歩く練習などをしていました。かいごの人にささえられて、がんばっていました。リハビリをがんばったからなのか一緒にボール遊びも家でできるようになりました。おじいちゃんは私たちがおじいちゃんの家遊びに行くと、いつも笑ってくれます。いつも「今日は暑かった？」などの日常会話をよくします。さいきんはできることも増えてきました。トイレやお風呂も一人でできるようになっていきました。一番ビックリしたのは床でおじいちゃんがふつきんをしていました。ふつきんをしているおじいちゃんを見て私は「おじいちゃん、まだまだ元気でよかった」と思いました。今までは病院での入院だったのに、家のベツトへとうつって、今ではいつもの元気なおじいちゃんにもどつてきていました。車いすはまだ使っているけど、ゆっくりならほじょ

付で歩けるようになりました。

私にとっておじいちゃんは大切な人です。ある日の夏休みお母さんもお父さんもいそがしかったときにおじいちゃん車でいろいろなところに連れて行ってくれました。私もおじいちゃんにたくさん助けてもらいました。だから私は病気になつてもおじいちゃんのこと大好きです。今度は私がおじいちゃんを助けて、早く元気になるってほしいです。



ボランティアに参加して感じたこと

長岡市立中之島中央小学校

四年 笹岡大和

ぼくの母は、介護施設の相談員をしています。大学を卒業してから、ずっと福祉の仕事をしています。

昨年の秋、母の働く施設で、「ラン伴」というイベントがありました。ぼくは当日、ボランティアとしてイベントに参加しました。「ラン伴」とは、認知症をみんなに知ってもらったり、その病気について考えてもらうためのイベントです。認知症のある人や家族、支える福祉施設の人、一般市民がタスキをつなぎ、リレーをしながらゴールを目指すイベントです。認知症の人と関わるきっかけがないと、認知症というだけで、悪い病気というイメージを持ってしまいがちです。ぼくも、最初は（ぜったい認知症にはなりたくないなあ。）と思っていました。でも、実際にはそうではありませんでした。

当日は、早めに母の働く施設に行って、リレーの走者が来る前に、つめたい飲み物やひやおしほり、熱中症を予防するためのアメを配るじゅんびをしました。日かげで休んでもらえるように、イスをならべて休けいできる場所のじゅんびも手伝えました。じゅんびができる、施設の中に入り、応えんとしてリレーを見学するおじいちゃん、おばあちゃんたちに声をかけて、一緒に玄関に向かいました。その時、初めて車イスをおしました。リレーの走者の団体が見えてきました。ぼくは「がんばって!!」と大きな声で応えんしながら、飲み物やアメ、おしほりを手渡しました。走者の中には、車

みんなおそろいのオレンジ色のTシャツやリストバンドを身につけていました。九月初めのとても暑い日だったので、みんなぼくの渡す飲み物やおしほりをよるこんでうけとってくれました。その中で、たくさんの人といろんな話をしました。三十分ほどで走者の人たちは、次の目的地に向かって移動していきました。少しの時間だったけれど、とても充実した気持ちになりました。

母の話では、世界にはおよそ三千五百万人の認知症の人がいて、十年後には今の倍近い人が認知症になってしまうそうです。そのよくな人たちが安心して生活するためには、もっと周りの人たちが認知症について正しく知り、支えてあげることが大切だと思います。ぼくのように悪いイメージをもっていた人が、実際に認知症の人たちと関わる中で、地域で一緒に暮らす大切な人だと思えるようになったらいいと感じました。ぼくも、もっと認知症について学んでいきたいと思っています。

募金活動を通して変わった私

長岡市立青葉台中学校

一年 栗原未符

「今年もユニセフ募金を行いますか。」

小学校六年生のとき、運営委員長だった私に先生は言った。

「はい、行います。」

と、私は元気よく答えた。私が今、元気に楽しく家族と過ごせているのと反対に、家族とくらすえず、友達にも会えずに悲しい毎日をせいいっぱい生きている同じ年ごろの子が世界中にたくさんいる。病氣や戦争で、一日を、一秒を生きられるか分からないような子がいる。私はそのことを思い、募金活動を行うことを決めた。

私は苦しい思いをしている子が世界中にたくさんいることは知っていたが、その子たちのために何ができるのかが分からなかった。

「その子たちを助ける他に、知ることでも救いになると思うよ。」
と、先生は言ってくれた。その子どもたちが、どんな生活をしているのかや、何のことに困っているのかなどを一つ一つ細かく調べた。私の目にとまったのは、複数人でノート一冊を使っていたり、せまく小さい部屋でたくさんの方が勉強しているところだった。私はその写真を見て心が苦しくなったことを覚えている。その子たちのために、募金活動をしようと考えた。

私は、少しでもその子たちのことを知って、募金に協力してくれるように募金活動期間中に放送を行った。

「世界中には、生活をするために困っている人がたくさんいます。みなさんは、その人たちのために何を届けますか。」

一人一人の思う気持ちが、苦しんでいる人を助けるのだということ。自分たちが今、当たり前のように過ごしていることが当たり前ではないこと。私はその人たちに何をしてあげたいか。などと、自分の気持ちを放送を通して、全校に伝えた。

「私は世界中のみんなが笑顔で暮らせるように、お手伝いをしたいんです。みなさんも、募金を通してお手伝いしませんか。」

その期間中にみんなの心が少しでも変わったかは分からない。だけど、その変わるきっかけとなれることができたならともうれしく思う。全校のみんなの温かい気持ちのおかげで、三日間という、とても短い期間で一万円以上の募金を集めることができた。そして、私たちが募金活動をしているときに、手伝ってくれるような温かい行動や、言葉がたくさん聞こえてうれしかった。

募金活動期間中に、一生懸命声がけをしたり、みんなの意見を聞いたことで、とても短い期間だったが、自分自身変わった気がする。自分一人には、ほんの少ししか力がないけれど、少しでも力になれるようにしようと思えるようになった。そんな私は、これからも困っている人を助けたいと思うし、自分にできることを探そうと思う。自分は少ししか力になれないかもしれないが、歩みよって支えたいと思う。

思い出が増えるように

長岡市立青葉台中学校

一年 安^{やす}田^だ千^ち夏^{なつ}

私には、身体が不自由な祖父がいましたが、昨年三月に亡くなりました。それまで、祖父を祖母が介護してきました。左側が麻痺していたので、着替えやトイレなど一人ですることはできませんでした。ごはんの前には注射があったり、薬をたくさん飲まないといけなかったりと大変だったと思います。小学校一〜五年生の間は、お風呂掃除やちよつとしたごはんをつくることや、洗濯ものをたたむなど自分ができることはするように心がけていました。一緒にトランプなどをして遊んだのも思い出です。身近なところでお年寄りや身体の不自由な人と触れ合えたことが自分の将来のためになったと思います。

その中でも、デイサービスや訪問リハビリの方々にお世話になりました。デイサービスでは、折り紙で何かを作ったり、お菓子を食べたりして祖父も笑顔で帰ってきてうれしそうにしていました。訪問リハビリの方には、家の中で階段をのぼったり、ストレッチをしていただきました。

祖父は検査入院から二年間ぐらい入院していました。入院中は勉強を持っていったりたくさんのお見舞いをしに行きました。当時、私は四、五年生でした。私は病院が大の苦手で行くのすらいやでした。病院に行っても、家族にくっついていて、四人部屋ときはカーテンをしめて回りが見えないようにするほど大きな病院が苦手でした。でも病院に行けるようになったのは祖父のおかげだと思っています。

ます。祖父は弱つていき、だんだん声が出なくなりました。祖父は何回も手術をしています。持病もあったので大変だったと思います。点滴が漏れて皮ふが壊死したことは特に覚えています。手術や注射などを乗り越えた祖父はすごいと思います。

病院には、先生や看護師さん、薬剤師さんなどがいます。私は、特に看護師さんとたくさん話せたと思います。

「おはようございます。」

と言うと、笑顔で

「おはようございます。」

と言ってくれたり、

「えらいね。」

とほめてくれたこともありました。優しい先生、看護師さんに出会えてよかったです。

市内の介護施設に地元の伝統芸能を発表しに行ったことも心に残っています。本番ではお年寄りの方がにこにこしていたので緊張もほぐれ、喜んでくれていたのでとてもうれしかったです。おどりで終わって、あめを配るためにお年寄りの近くに行つて

「どうぞ」

と言うと、にこにこして、

「ありがとう。上手だったね。」

とほめてくれたりあく手をしてくれました。その日の私たちがいるときはずっと笑顔でした。知らない人とも自分から話すことができました。お年寄りに話しかけるとうれしそうになることが分かりました。その日からずっと、地域の人にあいさつをしたり、信号などを待つときは話しかけるように心がけています。

このような経験から私の将来の夢は、医療系の仕事に就くことです。理由は、祖父のような人を助けたいと思ったからです。その人

と家族が一秒でも長く一緒にいられるように病気を治したり、ケア
をしたりしたいです。
家族の思い出が増えるように努力し、力になりたいです。



守る成長—勇氣は自分を強くする—

長岡市立青葉台中学校

二年 宮下 月希

「お前、何言ってるのかわかんねえ。何その喋り方、ウケるんですけど。」

そう言いながら、男の子たちは笑った。笑われたのは、耳の聴こえないAちゃん。言われている言葉が分からない。酷い言葉を言われても分かっていない。だから笑顔で笑っている。私たちにとつては普通の女の子。少し喋るのに苦労していても、手の動きやノートに言葉を書けば、普通に会話が出来る。久し振りに会うAちゃんと街に出た時の出来事だった。からかった男の子たちは、Aちゃんと同級生。月に何日か通常クラスで一緒の男の子たち。からかうために、声をかけてきたのだ。

「おい。どこ行くんだよ。聞こえないくせにさー。」

そう笑いながら男の子は言った。Aちゃんは、

「コ・ン・ニ・チ・ワ。ア・ツ・イ・ネ。」

一生懸命、自分の言葉で伝えている。きちんと聞いていれば、聞き取れる言葉なのに、彼女の言葉を馬鹿にしたのだ。からかわれているのにAちゃんは笑顔。心は悲しいはずなのに微笑んだ。男の子たちは更に容赦なくからかう。私は男の子たちを叱ろうとしたその時、「笑ってる、君らが馬鹿なんだよ。きちんと聞き取れるじゃないか。からかう位なら、仲良くしてやれよ！」

ずっと黙っていた弟が、口を開いていった。言葉は優しい口調でも、手にはしっかり力が入り握りしめて怒りを我慢しているのが分

かった。男の子は弟に、

「何だこいつ。Aのこと好きなのか？気持ち悪いな。」

と言いながら弟をこづきながら笑った。弟は、後ろに後ずさり尻もちをついた。弟は、前へ出て何か物言を言うタイプではない臆病者でもこの時は違った。Aちゃんを守るために男の子たちに向かつて言ったのだ。弟はまだ助けようと必死に次の言葉を考えているが、なかなか言葉がでてこない。私は、弟の気持ちがあったから、「こういう言葉、傷つけてるって分かって言っているよね？弱い人からかかってる自分、ださくない？悪いと思ってるなら最低だよあなたたち。」

少し怒り口調で弟の気持ちを代弁した。男の子たちは、黙りどうして良いか、考えている様子だった。弟は、それを見て男の子の手を取った。そして、Aちゃんの前へ連れて行き、Aちゃんの手と男の子の手を握らせた。

「はい。これで仲直りだよ。」

弟は、笑顔で言った。Aちゃんも何となく伝わったのだろう。笑顔で微笑んだ。男の子はさっと手を振り払ったが申し訳なさそうに、「ごめんなさい。」

とつぶやいた。Aちゃんも短い言葉は、口の動きで読み取れる。「アリ・ガ・ト・ウ」ゆっくり、つぶやいた。

普段弟は、わがままで乱暴な問題児。人見知りで、誰かのために前に出て文句を言える子ではない。でもこの時の弟は違った。弱い子をしっかりと守る。彼女をバカにする言葉を許せず、きちんと立ち向かった。弟の人を優しく守れる成長が、嬉しかった。どんな時でもそう。弱い人を助ける心、しっかりと強く持たなきゃと思知らされた。弟は、Aちゃんのヒーロー。手と手を結ぶ心が温かった。